

松江城下町遺跡における陶磁器の様相と編年

—17世紀代の資料を中心に—

小山泰生

はじめに

松江城下町遺跡の発掘調査は平成18年度から本格的に始まり、現在も継続して調査が行われている。城下町遺跡の発掘調査開始以前は、遺跡が現在の中心市街地と重複していることから大部分が消失しているものと考えられていた。しかし、実際に発掘調査が実施されると、地下には良好な状態で遺跡が残っていることが明らかとなった。

松江城下町遺跡の主な調査事例として、松江歴史館整備事業に伴う発掘調査（平成18～20年度）、城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査（平成18年度～現在）、広島高等裁判所松江支部・松江地方裁判所合同庁舎新営工事に伴う発掘調査（平成23～24年度）が挙げられる。これら城下町遺跡の発掘調査では数万点におよぶ出土遺物があり、その情報量は莫大である。

全国的に見ると近世考古学及び陶磁器研究は1980年代以降、80年代後半から90年代をピークに各地で発掘調査・報告がなされ、2000年代には減少傾向にあるものの、東京（江戸）・大阪・京都などの大都市遺跡、仙台・徳島・広島などの地方都市遺跡、陶磁器の生産地である瀬戸・美濃・肥前などの大窯業地では、断続的に発掘調査や編年研究が進められている。全国的な城下町遺跡の調査が一段落した時期に始まった松江城下町遺跡の発掘調査は後発となるが、これまでに各地で進められてきた調査・研究の蓄積を投影できるという点で恵まれた環境下にあると言える。

松江市では『松江市史』別編1「松江城」の刊行に向け、平成25年10月に佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏と大阪歴史博物館の松尾信裕氏を招いて「第1回松江城下町遺跡出土陶磁器検討会」を開催し、17世紀代を中心とした陶磁器の検討を行った。翌年、平成26年10月に「第2回松江城下町遺跡出土陶磁器検討会」を開催し、18～19世紀代を中心とした陶磁器の検討を行った。その中で消費地遺跡である松江城下町の年代基準となる陶磁器編年の作成は、検討会の目的でもある「今後の調査・研究水準を向上させ、併せて発掘調査の有効性と効率性を高めていく」ためにも焦眉の急を要する課題となっていた。

本稿では松江城下町遺跡出土の陶磁器について整理と検討を行い、17世紀代を中心とした陶磁器編年と時期区分を提示したい。陶磁器編年は、あくまでも現段階における松江城下町遺跡の遺構・遺物を位置付けるためのものであり、今後の調査の進展によっては資料の追加・補正が必要となる。

また、本稿に提示したものは概ね武家地の資料として把握できるが、町人地・寺社地・藩施設など様々な階層に適用できるものではないことを付記しておく。



大橋家与力屋敷出土の陶磁器
(平成22～26年度調査)

1. 発掘調査に見る松江の中世末から近世への転換

近世松江城下町の成立は17世紀代初頭の堀尾氏による松江城築城に始まる。しかし、その直前の中世末に展開していた末次・中町・白潟の港湾集落（町場）を取り込むように城下町が形成されており、近世松江城下町を考察する上で中世の姿を念頭におく必要がある。

城下町形成以前の城下周辺一帯には低湿地（沼沢地）が広がっていたとされるが、近年の発掘調査では母衣町・北田町で水田跡を検出するなど、人為的な活動痕跡が窺える事例が報告されている。

その後の城下町形成初期段階に位置付けられるものとして、松江城の東側に近接する殿町で鍛冶場や木材加工場の存在が想定できる遺構が見つかった。武家地の発掘調査では、屋敷地の縁辺部や街路と並行する位置に素掘の大溝（区画溝）を掘削し、掘削時に生じた残土をそのまま屋敷地の造成土として利用していることが明らかとなっている。また、屋敷地の初期造成手法は屋敷地一帯を一律に嵩上げするのではなく、まず建物構築予定地だけに先行して盛土を行い、その後の段階で盛土周囲の低位部に土砂を投入することにより屋敷地の平坦化を行う島状整地⁽¹⁾を採用している状況が確認されている。これらの城下町形成過程を前提として近世松江城下町が成立していくこととなる。

2. 基準資料

最初に、確実に時期を抑えることのできる資料を用いて、陶磁器の変遷を抽出する。本稿では松江城下町遺跡（南田町132外・134-11外）発掘調査で出土した陶磁器を取り扱う。調査地は松江城本丸から東へ約1.1km離れた場所に位置する。堀尾・京極期には武家地の一角にあたり、松平期初頭から幕末に至るまでの間には家老である大橋茂右衛門の与力（陪臣）の屋敷地として利用されていた（以下、大橋家与力屋敷と呼ぶ）。発掘調査では旧地表面と6面の遺構面を確認している（第1図）。

この調査地では遺構面ごとに調査を実施しており、複数期の遺構面を同時に調査していないこと、出土遺物が層位毎に取り上げられているという理由から変遷を示す上で有効な資料と言える。また、絵図や文献から大橋家与力屋敷が展開する開始時期が松平期初頭と明確なことが重要な点と考える。



第1図 基準資料とした松江城下町遺跡位置図

3. 松江城下町遺跡の時期区分と年代比定

ここでは松江城下町遺跡出土陶磁器について、時期区分と年代比定の根拠を提示しておきたい。基準資料である大橋家与力屋敷の発掘調査成果を基に、17世紀代を中心とした時期区分をまとめたものが表1になる。この表に従って、各遺構面内に含まれている陶磁器を時系列に並べた時、器種ごとにどのような変化があるのかを検討する。さらに、陶磁器を産地別に分類し、松江城下町遺跡における陶磁器の消長を概観する。

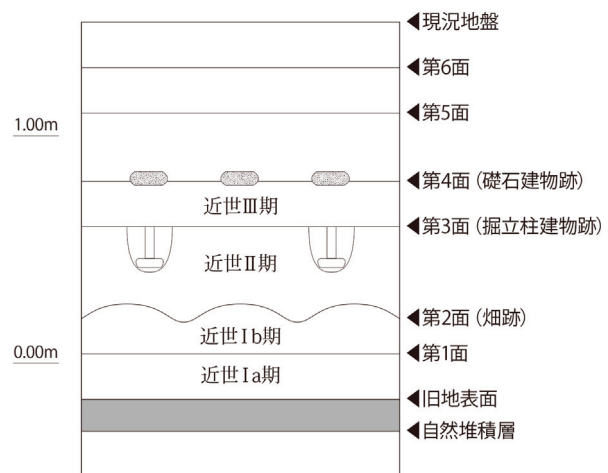
まず、表1に示した遺構面の時期設定について、1600年代初頭を始めとする古い遺構面の順に第1面～第4面としている。第1面は城下町造成以前の旧地表面上に盛られた最初の造成土であり、これを基盤層とする遺構面を堀尾期とした。第2面は基本的に畑地として利用されていた時期であり、これを堀尾～京極期とした。京極期の畑地と断言できない理由について、堀尾期の段階で既に畑地が開墾されていた可能性を否定できないことが挙げられ、引き算を用いて上限を初期造成後、下限を大橋家与力屋敷が展開する松平期以前と考えた。第3面以降から松平期の大橋家与力屋敷が展開し、掘立柱建物跡を検出した遺構面を第3面、礎石建物跡を検出した遺構面を第4面とした。掘立柱建物から礎石建物へ構築物に変化する時期は、遺物組成を根拠に1650年代を境としている。

表1 時期区分の基準と指標

歴年代	1600年代～1630年代前半	1630年代前半～1637年	1638年～1650年代	1650年代～1690年代
	堀尾期	堀尾～京極期	松平期	
時期区分	近世Ⅰa期	近世Ⅰb期	近世Ⅱ期	近世Ⅲ期
遺構面	第1面	第2面	第3面	第4面
主な検出遺構	城下町初期造成土	畑跡	掘立柱建物跡	礎石建物跡
年代根拠	城下町造成当初の遺構面	初期造成後～与力屋敷の展開以前	与力屋敷の展開(城下町絵図)	与力屋敷における構築物の変化
各期に並行する その他の遺跡	殿町279：南屋敷第4面	殿町287：北屋敷第3面 SK23 (1637年下限)		母衣町68：第3面 SK01 (1678年母衣町大火一括資料)
	母衣町68：第1面			
	母衣町180-29：第4面			

次に、これらの遺構面が層位的にどのように対応するのかを模式的に示したものが第2図である。時期区分は遺構面と対応するよう4つの時期に区分した。出土量の大半を占める肥前陶磁器をメルクマールとした場合、近世Ⅰ期を陶器碗・皿の窯詰め技法の違いからⅠa期とⅠb期に細分し、近世Ⅰa期は胎土目積み技法が主体となる段階、近世Ⅰb期は砂目積み技法が主体となる段階とした。近世Ⅱ期は肥前磁器が入ってくる段階とし、初期伊万里の出土が見られる。近世Ⅲ期は肥前陶器では呉器手碗や京焼風陶器、肥前磁器では日字鳳凰文皿や芙蓉手皿の出土が見られる。

以上の検討から、近世Ⅰa期を1600年代～1630年代前半まで、近世Ⅰb期を1630年代前半～1637年まで、近世Ⅱ期を1638～1650年代まで、近世Ⅲ期を1650年代～1690年代までの陶磁器群とした。



第2図 大橋家与力屋敷の基本層序模式図

4. 陶磁器の様相と編年

前述した4つの時期区分に基づき、ここでは各期の特徴を検討したい。そして、陶磁器の編年を提示して17世紀代の様相を概観する（第3・4図）。なお、図中に実測不可として掲載できなかった陶磁器の中には、産地の特定が可能なものがあるため、これらは本文中に含めて補うこととする。

国産陶磁器の分類・編年にあたっては、生産地の年代指標として瀬戸・美濃は大窯製品編年⁽²⁾、備前は乗岡編年⁽³⁾、肥前は大橋氏が実見された陶磁器の年代観を軸に九州陶磁器編年⁽⁴⁾を使用した。

(1) 各期の様相

〔近世 I a期〕 1600年代～1630年代前半

輸入陶磁器

青磁の出土が無く、白磁の皿が少数出土するが、ほとんどは青花で占められている。青花碗・皿は景德鎮系と漳州窯系のものが多く、精製のものが目立つ。その他に華南三彩の小皿がある。

国産陶磁器

肥前陶器が大半を占める状況で、瀬戸・美濃、志野、備前、萩（山口）、上野・高取（福岡）が少数出土する。瀬戸・美濃は天目碗、灰釉内禿皿、見込みに印花をもつ灰釉折縁ソギ皿、志野菊皿などが出土している。生産地の年代観で大窯Ⅳ期（1590～1610年代）のものが主体である。

備前は德利、壺、播鉢があり、乗岡編年近世1c期（1598～1620年代）のものが主体である。萩（山口）は丸皿や稜皿、上野・高取（福岡）は丸碗や筒形碗がある。

肥前陶器は生産地の年代観で九陶編年Ⅰ-2期（1594～1610年代）のものが主体である。碗は丸碗、天目碗、筒形碗があり、鉄釉や灰釉を施すものが多い。皿はすべて胎土目で、なぶり口の口縁をもつものを含む。砂目の出土は無い。碗皿類の高台は露胎で、鉄絵を施した絵唐津が目立つ。その他に、底部に貝目をもつタタキ成形の壺がある。この時期に肥前磁器は出土していない。

土師器皿は京都系のみで、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施すものがある。

〔近世 I b期〕 1630年代前半～1637年

輸入陶磁器

近世 I a期と同様な状況で、ほとんどは青花で占められている。青花碗・皿は景德鎮系と漳州窯系のものが多く、精製のものが目立つ。

国産陶磁器

肥前陶器が大半を占める状況は変わらず、瀬戸・美濃、志野、織部、備前、萩（山口）、上野・高取（福岡）が少数出土する。瀬戸・美濃は灰釉内禿皿、灰釉折縁ソギ皿などが出土している。生産地の年代観で大窯Ⅳ期後半（1600～1610年代）のものが主体である。

備前は壺、播鉢があり、引き続き乗岡編年近世1c期（1598～1620年代）のものが主体である。萩（山口）は丸碗や丸皿、上野・高取（福岡）は丸碗がある。

肥前陶器は生産地の年代観で九陶編年Ⅰ-2期のものが主体だが、Ⅱ期（1610～1650年代）のものが少数入る。碗は丸碗、筒形碗があり、全面施釉（畳付無釉）するものが見られる。皿は胎土目が少数入るものの、近世 I a期と大きく異なる点は、この時期から砂目が主体となることである。砂目刷毛目皿や二彩唐津が出土するのが特徴的で、数点の溝縁皿が入る。この時期も肥前磁器は出土していない。

土師器皿は京都系が圧倒的な割合を占め、底部外面に糸切り痕をもつ在地系が少数出土する。

〔近世Ⅱ期〕 1638年～1650年代

輸入陶磁器

この時期の輸入陶磁器は数点あるが、近世Ⅰa・Ⅰb期と比べて減少する。青磁・白磁の出土が無く、青花で占められている。青花碗・皿は景德鎮系と漳州窯系のもので、精製と粗製のものが共伴する。

国産陶磁器

国産陶磁器の組成は、肥前磁器の出現によって大きな変化が見られる。肥前陶磁器が大半を占める状況で、織部、備前が少数出土する。肥前陶磁器の増加と呼応するように、瀬戸・美濃、志野、萩（山口）、上野・高取（福岡）の出土が見られなくなる。

備前は壺、播鉢があり、乗岡編年近世2a期（1620～1630年前後）のものが含まれる。

肥前陶器は生産地の年代観で九陶編年Ⅱ期（1610～1650年代）のものが主体となる。碗は丸碗、筒形碗がある。皿は胎土目の出土が無くなり、砂目で占められるようになる。中でも、溝縁皿の増加が目立ち、肥前磁器がスタートの頃に比定されるものが主体となる。

肥前磁器は生産地の年代観で九陶編年Ⅱ-1期（1610～1630年代）の初期伊万里が数点出土するが、Ⅱ-2期（1630～1650年代）のものが主体となる。碗は高台無釉のものが多く、鉄釉や青磁釉を施すものが見られる。青磁釉の碗では、見込みに菊花文を入れたものがある。小坏は蘭文を施した端反口縁のものがある。皿は1630年代後半～1640年代を中心に生産されたイゲ縁皿や型打成形の皿がある。

土師器皿は京都系と在地系が共伴するが、京都系が減少して在地系が増加し、その割合が逆転する。この時期から土師器皿は、次第に京都系から在地系へ切り替わることを示している。

〔近世Ⅲ期〕 1650年代～1690年代

輸入陶磁器

輸入陶磁器は青花が極少数出土するが、近世Ⅱ期のものが伝世している可能性が考えられる。青花碗・皿は景德鎮系と漳州窯系のもので、精製と粗製のものが共伴する。

国産陶磁器

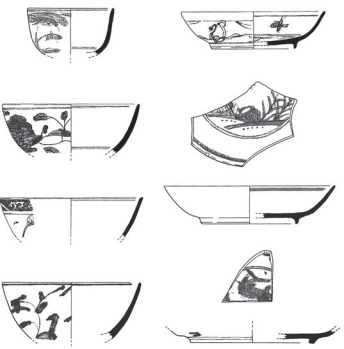
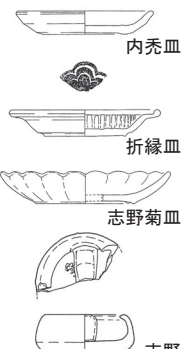
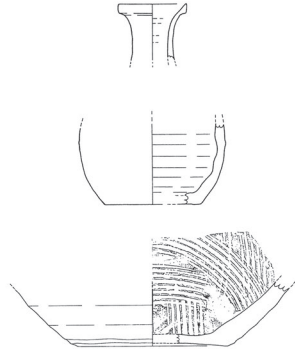
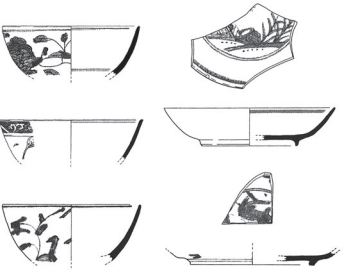
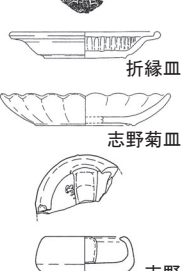
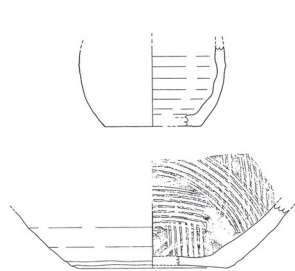
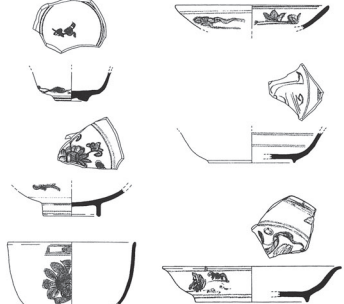
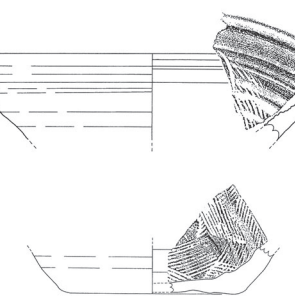
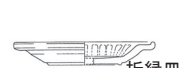
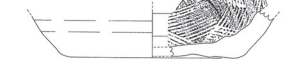
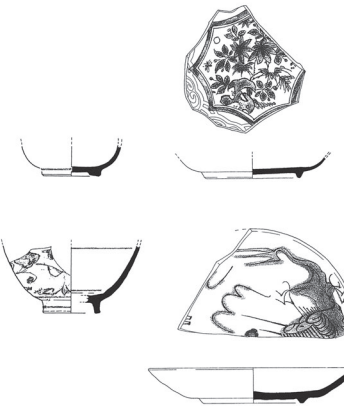
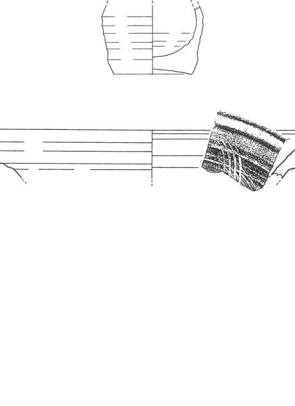
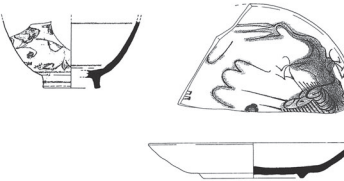
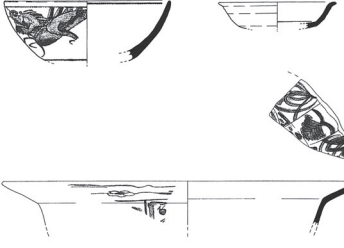
国産陶磁器の組成は、近世Ⅱ期の組成と大幅な変化はないものの、この時期の特徴として肥前陶器の減少と肥前磁器の増加が見られることが挙げられる。肥前陶磁器が大半を占める状況は変わらず、織部、備前の出土が見られなくなる。

この時期から、備前播鉢と入れ替わるように須佐播鉢が入ってくる。また、京信系陶器が少数出土している。

肥前陶器は生産地の年代観で九陶編年Ⅱ期のものが減少し、Ⅲ期（1650～1690年代）のものが主体となる。碗は呉器手碗や京焼風陶器がある。皿は砂目で占められ、内野山窯産のものが目立つ。溝縁皿や鰐縁皿は引き続き出土し、この時期に特徴的な蛇ノ目釉剥ぎ皿が極少数見られる。

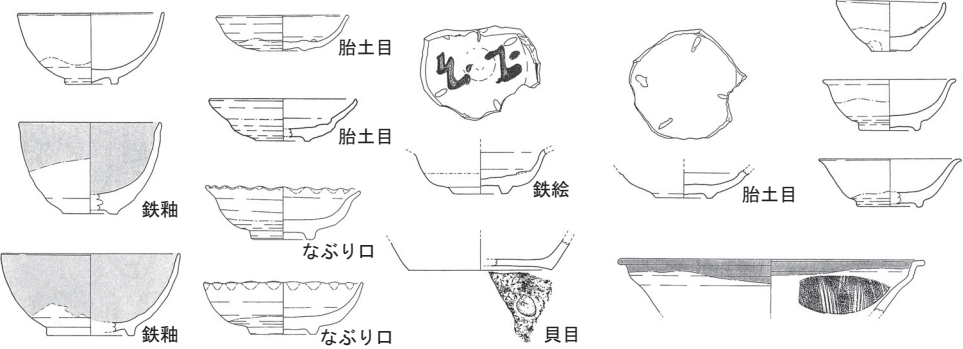
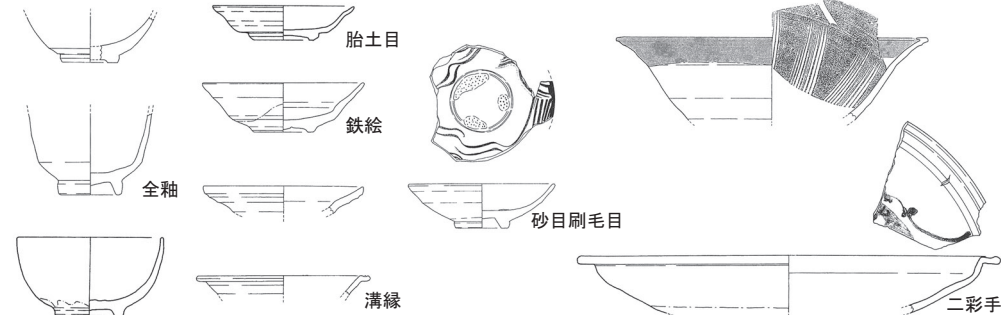
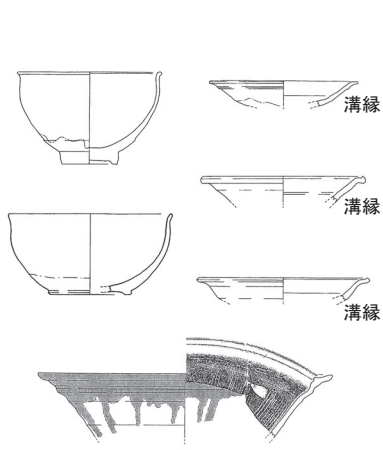
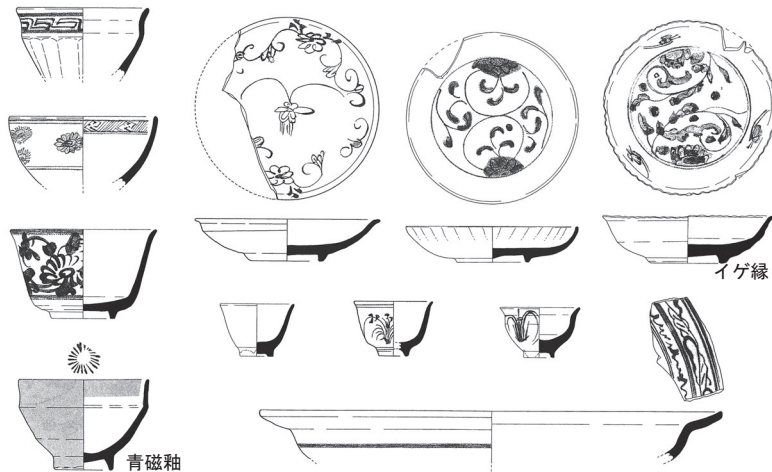
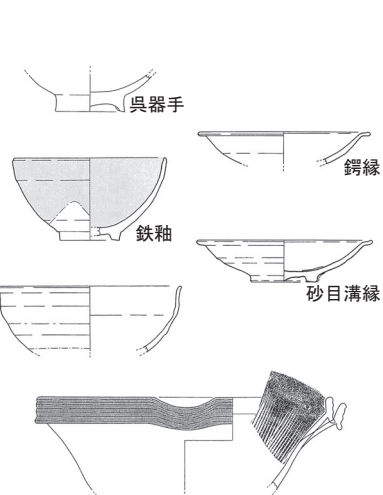
肥前磁器は生産地の年代観で九陶編年Ⅱ-2期のものが減少し、Ⅲ期（1650～1690年代）のものが主体となる。碗は丸みをもった網目文の碗や鉄釉・青磁釉掛け分けの碗がある。小坏は端反口縁のものが多い。皿は1650年代以降を中心に生産された日字鳳凰文皿や芙蓉手皿の他、波佐見青磁の皿がある。手塩皿も少数出土し、青磁釉や型打成形の菊花皿がある。

土師器皿は京都系の出土が無くなり、在地系で占められる。この時期から土師器皿は、在地系のものへほぼ移行する。

区分	歴年代	中国磁器	瀬戸・美濃	備前
近世Ⅰa期	1600年代 初頭			
	堀尾			
近世Ⅰb期	京極			
	1637年			
近世Ⅱ期	1638年			
	松平			
近世Ⅲ期	1650年代			
	1690年代			

[中国磁器、瀬戸・美濃、備前]

第3図 17世紀代の陶磁器編年(1) (陶磁器S=1:6)

肥前陶器				肥前磁器
				出土無し
				出土無し
				
				

[肥前陶器、肥前磁器]

第4図 17世紀代の陶磁器編年(2) (陶磁器S=1:6、播鉢S=1:8)

(2) 各期の陶磁器産地別組成と国産陶磁器の消長

以上の編年を踏まえて、ここでは各期の陶磁器産地別組成と国産陶磁器の消長を検討する。表2には基準資料とした大橋家与力屋敷1軒分の陶磁器産地別組成を、表3には各期の国産陶磁器の消長を示している。出土した17世紀代の陶磁器を産地別に見ると、輸入陶磁器では景德鎮系と漳州窯系の中国青花が大半を占める。国産陶磁器では肥前が圧倒的に多く、瀬戸・美濃、志野、織部、備前、上野・高取（福岡）、萩（山口）、須佐がこれに次ぐ。京焼、信楽などの関西系陶器も出土するが極少数で、越前、常滑、丹波などは出土していない。組成グラフでは近世Ⅰa期・Ⅰb期には中国磁器、瀬戸・美濃、肥前陶器が主体で、これに志野、織部、備前、上野・高取（福岡）、萩（山口）が入る組成から、近世Ⅱ期・Ⅲ期になると中国磁器、瀬戸・美濃、志野、織部、備前が減少し、肥前陶磁器が主体となる組成へ変化していることが読み取れる。

産地別の様相を見る限り、松江には九州地方や中国地方からの陶磁器が比較的多く流入していたことが考えられる。

この状況こそが流通経路に規定される地域性であり、松江城下町の陶磁器の消長を示すものと捉えられる。

表2 各期の陶磁器産地別組成

陶磁器組成内訳	近世Ⅰa期		近世Ⅰb期		近世Ⅱ期		近世Ⅲ期	
	破片数	割合%	破片数	割合%	破片数	割合%	破片数	割合%
①中国白磁	2	2.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0
②中国青花	9	11.5	24	8.6	5	3.3	2	1.6
③瀬戸・美濃	9	11.5	10	3.6	0	0.0	0	0.0
④志野	4	5.1	3	1.1	0	0.0	0	0.0
⑤織部	0	0.0	3	1.1	1	0.7	0	0.0
⑥備前	4	5.1	16	5.8	4	2.7	0	0.0
⑦肥前陶器	42	53.9	215	77.3	65	43.6	20	15.7
⑧肥前磁器	0	0.0	0	0.0	74	49.7	83	65.3
⑨上野・高取(福岡)	6	7.7	4	1.4	0	0.0	0	0.0
⑩京信系	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	2.4
⑪萩(山口)	2	2.6	3	1.1	0	0.0	0	0.0
⑫須佐	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	3.1
⑬瓦質土器	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	2.4
⑭土器	0	0.0	0	0.0	0	0.0	12	9.5
合計	78	100.0	278	100.0	149	100.0	127	100.0

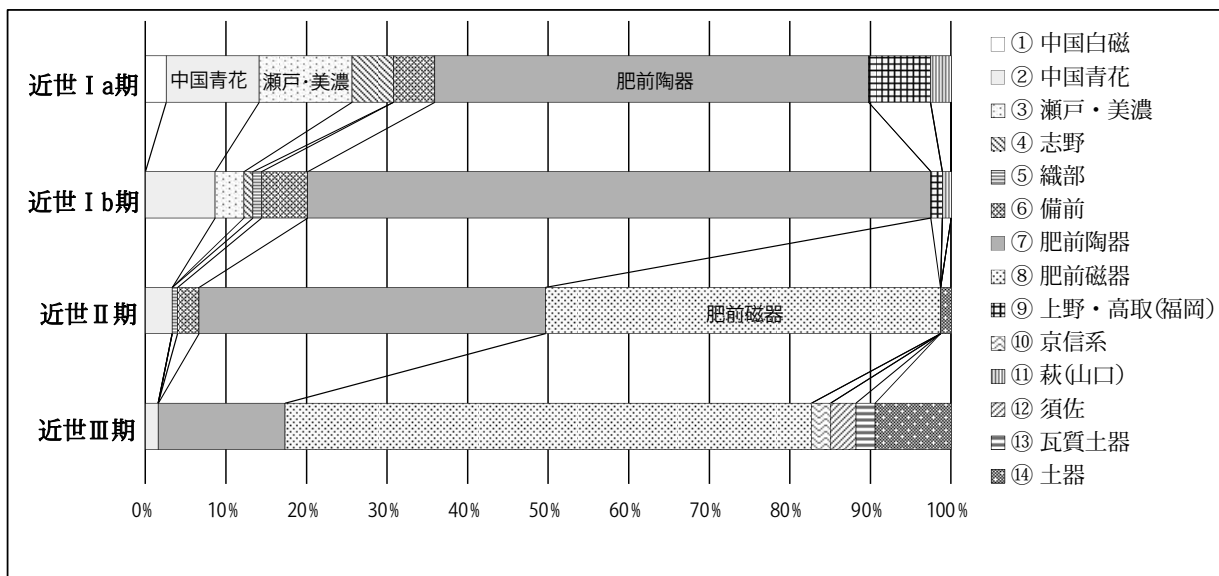


表3 各期の国産陶磁器の消長

時期区分	遺構面	瀬戸・美濃		志野	織部	備前		肥前陶器										肥前磁器			上野 高取	萩(山口)		須佐
		碗	皿			播鉢	徳利	碗				皿						播鉢	碗	皿		碗	皿	
								鉄絵	高台無軸	全面施釉	呉器手	鉄絵	胎土目	砂目	溝線	刷毛目	二彩手							
近世Ⅰa期	第1面	●	●	●		●	●	●	●			●	●				●			●		●		
近世Ⅰb期	第2面		●	●	●	●	●		●	●			●	●	●	●	●			●	●	●		
近世Ⅱ期	第3面				●	●	●		●	●				●	●		●	●	●					
近世Ⅲ期	第4面									●	●			●	●		●	●	●				●	

●=出土陶磁器

5. 17世紀代前半の青花の様相と肥前磁器の出現

本稿では、青花碗・皿についての詳細な分類まで至っていないが、森穀氏による青花分類⁽⁵⁾に則して、松江城下町遺跡における17世紀代前半の青花の概観を示しておきたい。

松江城下町遺跡では17世紀代初頭から景德鎮系と漳州窯系の精製・粗製品が入る。景德鎮系の碗は饅頭心の碗E群が無く、底部が平坦な碗Gや底部外面が窪む碗Hが主体となる。皿は皿E群が主体となり、口縁部端反でペンシルドロウイングの手法を用いた皿B3や芙蓉手の皿Iが入る。これら景德鎮系の精製品に漳州窯系の碗F群や皿F群粗製が加わり、17世紀代前半の青花が構成されている。

この状況は近世Ⅰa期から近世Ⅰb期まで大きく変化せず、近世Ⅱ期の肥前磁器の出現を境として青花の出土が減少することとなる。その後は肥前磁器が急速に増加し、青花に取って代わる。

このように、近世Ⅰb期から近世Ⅱ期にかけて青花の占める割合が減少することは、近世Ⅱ期における肥前磁器の出現が画期となっていることが明瞭である。生産地での肥前磁器の焼成開始年代は1610年代とされるが、消費地である松江城下町遺跡での肥前磁器の出現は1638年以降と考えられる。この年代は安来市広瀬町の富田川河床遺跡での肥前磁器の出現期とされる1635～1644年前後⁽⁶⁾と比べても齟齬が無い。一方で、松江城下町遺跡における肥前陶器の出現については、現段階で17世紀代を遡ることのできる資料が見つかっておらず、まだ解決を見ない問題となる。

6. 肥前陶器の胎土目から砂目への移行

ここでは松江城下町遺跡出土の肥前陶器に主眼を置き、胎土目から砂目へ移行する時期⁽⁷⁾について検討してみたい。近世Ⅰa期の肥前陶器はすべて胎土目で、砂目は出土していない。松江城下町遺跡で砂目が確認できるのは、近世Ⅰb期の1630年代前半以降からで、近世Ⅱ期の肥前磁器と共伴する時期の砂目には溝縁皿が多く見られる。

この状況から近世Ⅰb期の胎土目と共伴する時期の砂目と、近世Ⅱ期の肥前磁器と共伴する時期の砂目は区別する必要があるが、松江城下町遺跡では近世Ⅰb期において胎土目が少数残るものの、主体となるのは砂目であり、胎土目から砂目へ移行する時期は1630年代前半頃にあると考える。

7. 消費地遺跡における陶磁器組成の比較 ―大坂と松江―

17世紀代前半の大坂の陶磁器組成と松江の陶磁器組成を比較すると、大坂で「豊臣後期」とされる1598～1615年の陶磁器組成と、松江城下町が展開し始める近世Ⅰa期の陶磁器組成とが類似している。さらに「徳川初期1・2」とされる1615～1650年の陶磁器組成についても、松江の近世Ⅰb・Ⅱ期の陶磁器組成が類似していることが分かる。

大坂と松江では、大都市遺跡と地方都市遺跡の違いがあるが、同じ消費地遺跡として大枠で捉えた場合の陶磁器組成は大きく異ならないことが言える。しかし、細分した陶磁器組成の中ではその様相に変化が見られる。

前述した肥前陶器の胎土目から砂目への移行を例に挙げると、大坂では胎土目から砂目へ移行する時期を元和末～寛永初年（1620年代中頃）とされており、松江では寛永中頃（1630年代前半頃）と考えている。これらを比較すると松江の方が大坂よりも移行する時期がやや遅く、数年のタイムラグが生じていることとなる。その要因として大都市遺跡と地方都市遺跡での消費差、あるいは流通経路の違いによる供給の時期差などが考えられる。

おわりに

松江城下町遺跡における17世紀代の陶磁器の様相を概観してきたが、その中で最も特徴的な点は17世紀代初頭が松江城下町の開始時期ということであろう。陶磁器組成の観点から、松江では1600年代初頭にそれまで組成の中心となっていたと思われる中国青花や瀬戸・美濃、志野、織部などのいわゆる桃山陶磁が1630年代を境に徐々に減少していき、肥前陶器（胎土目・鉄絵）が中心となる近世Ⅰa期から始まる。その後、肥前陶器（砂目）が中心となる近世Ⅰb期、松平期の開始年代である1638年以降に肥前磁器が入り、肥前陶器と肥前磁器が中心となる近世Ⅱ期、1650年代以降に肥前陶器が減少して肥前磁器が増加する近世Ⅲ期という変遷を辿る。

近世陶磁器は数年単位といった短い時間幅で変化を見せることから、その年代比定は慎重にならなければならない、それを限定していかなければ遺跡の正当な評価を行えないことにもなる。近世城下町は発掘調査だけではなく、文献史学や自然科学分析から得られる成果も重要であり、これらを踏まえた総合的な知見から判断することで新たな理解へと繋がる。陶磁器から読み取れる変化を着実に捉え、松江の資料に即した暦年代観の構築と地域性を抽出することで、松江城下町遺跡の価値を更に高めるものと確信する。この資料が今後の松江城下町陶磁器研究の一助となれば幸いである。

〔謝辞〕 陶磁器の分類・年代観について佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏、大阪歴史博物館の松尾信裕氏に詳細な検討と御教示を賜った。また本稿を作成するにあたり、大田市教育委員会の西尾克己氏、米子市文化財団の佐伯純也氏、松江市まちづくり文化財課の川上昭一氏には有益な御指導をいただいた。これらの方々に心から感謝申し上げます。

注

- (1) 島状整地は、低湿地に形成される徳島城下町の発掘調査で最初に確認された造成手法である。
- (2) 愛知県史編纂室2007「瀬戸・美濃大窯製品編年表」『愛知県史 別編 窯業2』
- (3) 乗岡実2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- (4) 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
- (5) 森毅1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会
- (6) 村上勇1986「寛永21年銘木札を伴う陶磁」『貿易陶磁研究』No.6 日本貿易陶磁研究会
- (7) 大橋康二氏は、肥前陶器（唐津焼）の皿に見られる重ね積みの痕跡（窯詰め法）を、粘土を団子状におく胎土目積みと、砂を団子状に固めた砂目積みで分類し、胎土目から砂目へと変化することを明らかにした。そして初現期の唐津焼は胎土目であり、年代を1580年頃とする。生産地の胎土目から砂目への移行の時期は、文禄・慶長の役によって連れ帰られた朝鮮人陶工によってもたらされた技術変化と理解し、その時期を慶長年間とされている。

参考文献

論文

松尾信裕2005「近世大坂の発掘調査と地域史研究」『日本歴史』第690号 吉川弘文館
森 毅1992「十六世紀後半から十七世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会

報告書

落合昭久他編2011『松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡（殿町287番地・殿町279番地外）発掘調査報告書』松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団
小山泰生編2014『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書4』松江市教育委員会・（公財）松江市スポーツ振興財団
小山泰生編2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書5』松江市教育委員会・（公財）松江市スポーツ振興財団

（こやま たいせい 公益財団法人松江市スポーツ振興財団埋蔵文化財課調査員）